

# オルガン 開港時の音色

インターネットオークションで見つけた古いリードオルガンは、開港間もない横浜の外国人居留地から東海地方へと渡った貴重なものだった。購入した横浜市の会社社長、山本博士さん(49)は、往時に思いをはせてもらおうと10月にオルガンをお披露目することにした。

【中田卓二】

## 10月横浜でお披露目

山本さんは、1855 した後の横浜の変遷を9 (安政6) 年に開港 知る手がかりとして、

ドーリング商会が輸入した  
オルガンと山本博士さん



## 19世紀末の輸入品 ネットで落札 修繕

オルガンを購入後、山本さんは西川に同商会での修繕経験があったことを知り、不思議な縁を感じた。

古写真や真鍮焼などを収集している。ネットでのこのオルガンに出合ったのは昨年9月。画像をよく調べたところ、「輸入元 横濱白丸番館 ドーリング商会」という銘板が付いているのを見つけ、迷わず購入した。

ドーリング商会は1881(明治14)年に外国人居留地で開業したドイツ系の楽器商。実際に1895年まで109番地で営業していたことが確認されている。オルガンは米国製の楽器で、山本さんはもともとと、明治時代に横浜で国内最初のオルガンを製造したとされる西川虎吉の製品を探していた。ドーリング商会の

のミス・アメリカン社製の輸入品だった。専門家によると、同商会製のピアノは国内に少なくとも5台現存しているが、オルガンは見つかっていない。山本さんが購入したオルガンは同商会製ではないが、同商会が輸入に関わった貴重なものという。

空気を振動させてリードを交換した。当時の音色が損なわれると、考え、「リードはできるだけ残し、外装もいじらないでほしい」と注文。費用は購入額の7万5000円をはるかに上回ったという。



オルガンの銘板

オルガンは10月13日に横浜市中区開かれるシンポジウムで初披露される。山本さんは今後の活用策も検討中で、「残さず残った生命力のあるオルガン。音色を聴いて開港直後にタイムリッフルしてほしい」と語っている。